「ただキリストがあがめられることを」（ピリピ１：１２－２６）　　　　　　2015.9.22

（千葉聖会①）

皆さん、こんばんは。ご紹介いただきました佐藤です。

私が聖書学院を卒業いたしまして最初の５年間、千葉教区、小見川で、夫婦でご奉仕をさせていただきました。本当に懐かしい先生方を前にして（おります）。今、先ほど賛美をしておられる姿を見ながら、当時とだいぶメンバーが替わりまして、私がおりました頃におられた先生方、４組でした、だいぶチェンジしたことでした。この千葉教区の聖会も、茂原の近くの笠森保養センターで行われていた頃、５年間通いました。忘れられないのは、あの台風が来たときです。台風が追っかけて来るのに、その中を日曜日の夜ですかね、集いました。茂原の町が水浸しになって、あの頃ナビなんてありませんから、一度道に迷ったらあの茂原の町で本当に困ったんですね、だんだんと暗くなってきて。なんとかたどり着いたんですけれども、確か下瀬先生は夜中、水の中で一晩過ごして次の日の朝いらしたハズであります。で、「講師の先生、来られるのかな？」と思いましたら、当時の教区長の宇都宮先生が、わざわざ東村山まで車を飛ばしまして、小林和夫先生を迎えに行って来たと。それで、聖会が無事に行われた、その思い出がございます。

今回、私が千葉教区担当の教団委員ということで、昨年の千葉教区の牧師会で、「この聖会で奉仕をするように」と言われ、多勢に無勢、断り切れなくて引き受けてしまいました。今日、ココに来てこの立派な会場に入って、「ああ、やっぱり引き受けるんじゃなかった！」と思ったですね。千葉教区というのは、立派な先生方がたくさんおられて、説教を一生懸命学んでいる先生方がおられて、新約の専門家もおられて、－旧約にしておけば良かった…と思ったんですけれども。数年前、ＮＨＫ大河ドラマで「天地人」というのをやっていましたね。あの主人公の直江兼続の子役を演じた加藤清史郎くんが、「わしはこんなとこ、来とうはなかった！」と言うセリフが有名になりました。そんな心境であります－「わしはこんなとこ、来とうはなかった！」。

そう思いますのは、これだけお集まりの皆さんの期待に応えられる自信がないからであります。こう言っては何ですけれども、皆さん、毎年聖会を行っていますと、講師の当たり外れがあるものであります。笑うというのは、皆さん覚えがあるだと思いますね。せっかく期待して、時間とお金をかけて泊まりがけで行ったのに、ちっとも恵まれなかった！ということがあったりするものであります。ですから、最初からお断りしておきますけれども、たまにはハズレの年もある。「ああ、何だかピンと来ないなあ」と思いましたら、「ああ、そうか、ハズレか！」と思っていただいてご容赦いただきたい、まあ、それでも諦めずに、是非、来年またこの聖会にお出でいただきたいと思います。

始まったばっかりで、これからというときに、また来年というのも変ですから、よろしければせっかくですから、３回お話をさせていただきたいと思います。このような奉仕をしております者でも、たまに、「とっても良かった」と言われることがあるんですね。ときどき、私たちの教会でも外部の先生をお招きして説教していただいたくことがありますが、その後の祈祷会などでその感想を聞いたりしますと、「ああいうのは初めて聞いた」みたいなことを言うことがあるんですね、信徒の方。それを聞きながら、こっちとしては、「あのぐらい、ボクいつも言ってるじゃん！」と思うんです。ところが、信徒の方は、いつもの牧師が語っているときにはちゃんと聞いていなくて、余所の先生が来られると、いつもよりも気合いを入れて聞くようであります。余所の牧師が語るというのは、そういう効果もあるらしいですので、ぜひいつもより気合いを入れて聞いて欲しいと思います。

今回は、ご案内のように、このピリピ人への手紙から、３回続けてお話をしたいと思っています。今晩開いている箇所は、８年前、２００７年の箱根聖会でもお話した箇所です。東宣社で売っています、『さわやかな聖霊の風』、この中にそのときの説教が入っています。私のお勧めは、最初の島津先生の、お勧めですね。あのとき箱根で私の説教を聞いた先生がおられるはずです、どうぞ遠慮なくお休みください。そのほうがこっちも話しやすいですから、お休みいただきたいと思いますが。この同じ箇所を選びましたのは、ココにも掲げてありますこの１章２０節の聖句、私が大好きな、自分の伝道者としての生き方を決定的に方向付けている聖句だからです。「そこで、わたしが切実な思いで待ち望むことは、わたしが、どんなことがあっても恥じることなく、かえって、いつものように今も、大胆に語ることによって、生きるにも死ぬにも、わたしの身によってキリストがあがめられることである」。この聖句のように生きたいというのが、私の心からの願いであります。そしてココに、聖なるものとされた者たちの生き方が記されていると思います。箱根聖会とは少し語り口を変えながら、これを私たちに対する喜びの知らせとして聞きたいと、そう願っています。

使徒パウロがこのピリピの手紙を書きましたのは、福音のために囚われの身となり、ローマの牢獄の中にいたときであろうと言われています。エペソだと言う方もいます。けれども伝統的にはローマだと言われます。キリストを宣べ伝えていたために、捕らえられてしまった。パウロは以前から、世界の中心地ローマに行って、キリストを伝えたいと願っていた。念願のローマに来たものの、自由な活動は許されず、今は鎖につながれている。こんな状況では福音を宣べ伝えたくてもそれが出来ない。それどころか、当時の牢獄というのは、非常に厳しい環境だったようです。さらに今、自らの裁判の行方を待っている身であります。釈放されるのか、あるいは処刑されるのか、どっちになるか分からない、とても不安定な立場におりました。いつココから出られるのか、そもそも生きてココから出られるのかも分からない。これが私たちでしたら、神さまのために奉仕をしてきたのに、こんな目に遭ってしまった！と嘆き、文句を言うところであります。直接福音を伝えることができなくなって、自分は一体何のためにココに来たのか、いるのか？そう言いたくなるところであります。

ところがパウロは、そのような囚われの身でありながら、喜びにあふれております。「喜びの手紙」と呼ばれるこの書簡には、患難の中にあっても喜ぶ、パウロの喜びがあふれております。何を喜んでいるのか？－今晩お読みしている箇所では、福音が前進したことを喜んでいる。１２節から読み始めました、「さて、兄弟たちよ。わたしの身に起った事が、むしろ福音の前進に役立つようになったことを、あなたがたに知ってもらいたい」。パウロはこの１２節から、ピリピの人々に自らの近況を報告しております。使徒行伝１６章に、パウロが初めてピリピの町を訪れ、伝道したことが記されております。そのピリピの町を離れた後、実に様々なことがパウロの身に起こりました。行く先々で迫害に遭い、暴動が起こり、何度も命の危険にさらされた。そしてついには捕らえられ、今はローマで牢獄の中に入り、裁判の行方を待っている身です。それこそ一晩かかっても語り尽くせないような、実に様々なことがこれまで自分の身に起こってきた。

こういうとき、私たちは自分がどれだけ苦労したのか、これまで大変だったのか、そのことを聞いて欲しいと願うものです。キリストのためにどれだけ苦しめられたのか、どういう裏切りに遭い、命の危険にさらされ、それでもなお、どんなに忠実にキリストに従い続けてきたのか、それを語ろうといたします。要するに、周りの人から、「偉いねえ、よく頑張ったねえ」と言ってもらいたい。

ところがパウロは、近況報告するにあたり、こう語り始めます、「さて、兄弟たちよ。わたしの身に起った事が、むしろ福音の前進に役立つようになったことを、あなたがたに知ってもらいたい」（１２）。自分の身にどのようなことが起こったかについてはたった一言、「わたしの身に起った事が」と表現－それ以上は言いません。パウロは、自分のことよりも、福音がどのように前進したかということに耳を傾けて欲しい！　そう言ってパウロは、このあと、どのように福音が前進したかを語ります。パウロの願いは、「私の身に起こったことが、かえって福音を前進させることになったのを知ってもらいたい」。これは驚きの言葉ではないでしょうか。私たちの場合、福音の前進のことも聞いて欲しいかもしれないけれども、それ以上に、自分のことを聞いて欲しいと思うからです。キリストのことよりも、自分のことを第一に取り上げようとする私たちです。それはパウロの生き方とは正反対の生き方です。

パウロ自身、当初は、自分の身に起こったことが福音の前進にとって妨げであるように思われたのでありましょう。１２節に、「むしろ」という言葉がありますけれども、その思いが表されているようです。私の身に起こったことが、当初は、福音の前進の妨げになるように思われた。ところが、そうではなかった！と驚きをもって報告する。私が思っていたのとは正反対のことが起こった。思いに反し、災いと思える出来事が、何と福音の前進に役立っていた。

パウロは囚われの身となり、兵士たちによって監視されていたとも言われます。それらの兵士は、ローマ皇帝のすぐ側で仕える近衛兵たちだったのではないか、とも言われますね。投獄でもされなければ、どんなに行きたくても入れないような場所、会えないような人々、鎖につながれているがゆえに、望んでも入れないようなところに入って行き、会えないような人に会い、そこで福音を証することが許された。

さらにパウロが言及するもう一つの前進は、パウロに代わって次々と福音を宣べ伝える人々が起こされたということです。その後１４節に、「そして兄弟たちのうち多くの者は、わたしの入獄によって主にある確信を得、恐れることなく、ますます勇敢に、神の言を語るようになった」と言います。パウロが伝道出来なくなった！ということを聞いて、代わりに一生懸命伝道に励む者たちがたくさん起こった。その動機には二種類ありまして、パウロの欠けを何とか補おうとする、そういう善意から立ち上がった者たち。反対に、パウロとはいつも敵対している人たちの中から、パウロがいない今のうちに、自分たちの勢力を拡大しようという、まあ、悪意から立ち上がった者たちもいた。

パウロはこれらの事情を説明しながら、自ら質問いたします－１８節に、「すると、どうなのか。見えからであるにしても、真実からであるにしても、要するに、伝えられているのはキリストなのだから、わたしはそれを喜んでいるし、また喜ぶであろう」（１８）。たとえ不純な動機で伝道していたとしても、キリストが伝えられているのは間違いがない。もしこれが、間違った福音が伝えられているのならば、大きな問題でありましょう。けれども、あの人たちを通して、キリストの福音が伝えられていることに変わりはない。キリストが伝えられ、福音が前進しているなら、私はそれを何よりも喜ぶ！と言う。パウロは自分が軽んじられていることよりも、福音が前進していることを第一とした。

これが私たちなら、もし自分が軽んじられようならば、黙ってなんかいられないハズです。自分が軽んじられ、否定され、あるいは名誉が傷つけられたならば、何としてでも仕返しをしようと怒りに燃える。福音の前進のことなどよりも、自分の名誉回復のために躍起になるに違いない。ところがパウロは、「要するに、伝えられているのはキリストなのだから、わたしはそれを喜んでいるし、また喜ぶであろう」（１８）と言う。たとえ自分が軽んじられようとも、福音が前進していることを私は喜ぶ！

パウロはなぜ、こんな厳しい状況の中で、そして自らの栄誉が軽んじられている中で、なお福音の前進を喜ぶことができたのか？　その後の２０節がその理由であります。パウロの伝道者生涯を貫くところの、パウロの生き方そのものを表明する言葉です、「そこで、わたしが切実な思いで待ち望むことは、わたしが、どんなことがあっても恥じることなく、かえって、いつものように今も、大胆に語ることによって、生きるにも死ぬにも、わたしの身によってキリストがあがめられることである」（２０）。口語訳で「切実な思いで待ち望む」とあります、これは「首をなが～くして待つ」という姿です。首を長くして待つ。何を待つか、自分をとおしてキリストがあがめられること。

この「あがめる」と訳されているギリシャ語の言葉は、「メガルノー」という言葉。「メガ」で分かるように、「大きくする」というような意味ですね。声を大きくする「メガフォン」という言葉がありますが、もともとは同じ語源の言葉であります。この「メガルノー」という言葉、新約聖書では８回ほど使われているようですけれども、最もよく知られているのは、あの「マグニフィカート」と呼ばれる、主イエスの母となるマリヤの賛歌のところです。「わたしの魂は主をあがめ、わたしの霊は救主なる神をたたえます」（ルカ１：４６、４７）。この言葉、英語の聖書では、よく「マグニファイ」、「拡大する」という言葉が出てきます。「小さくてよく見えないものを、よく見えるように大きくする」。世の中の人々の目にはキリストが小さくてよく見えない。そこで私たちが自ら拡大鏡となって、皆さんの目にキリストがハッキリと見えるようにさせていただく。「ほらごらん、キリストはこんな方ですよ！」と指し示す。これがあがめるという言葉です。

パウロにとって、その願いがどれほど切実なものであるかというと、「生きるにも死ぬにも」、この一つのことを待ち望むという。「生きるにも死ぬにも」、どのようなときにも、たとえ死に直面するようなときにも、変わることなく一つのことを待ち望む。このときのパウロは、牢獄に囚われ、裁判を待っている身です。明日の命も分からないパウロにとって、本当は生きるか死ぬかが最大の問題のはずです。こんな状況では、キリストどころではない、福音どころではない、信仰どころではないといったところ。皆さんもそういう経験ないでしょうか。何か大きなことが起こったら、もう教会どころではない、福音どころではない、伝道どころではない。生きるか死ぬかが第一。この問題がどうなるかが第一。私たちの場合、そうなりますね。自分の命を守ることで精一杯で、生きるか死ぬかの問題が第一で、それ以外は二番目、三番目になります。

ところがパウロは、生きるか死ぬかよりも、もっと切実な願いがある、それは「私の身によって、キリストがあがめられることである」。私はこのことを目ざし、このことのために生きている！と言う。「キリストがあがめられる」というこの一つの目的の前には、生きるか死ぬかという人生最大の問題が相対化されてしまっている、もう第一の問題ではなくなっている。これはやっぱり驚きの言葉ではないでしょうか？

それは、私たちにとって、私たちの第一の願いとはかけ離れているからです。皆さん、私たちが普段、生きるにも死ぬにも、何を追い求めているでしょうか。このパウロの言葉に照らしながら自分たちの姿を見つめるときに、そこに私たちの罪の姿が明らかになってくるのではないでしょうか。それは、キリストではない、私自身があがめられることを願い求めている姿が、このみ言葉に照らし合わせられて明らかになってまいります。確かにキリストがあがめられることもいい、けれどもそれよりも何よりも、私たちがいつも追い求めていることは、この私があがめられるということではないでしょうか。

私がこのことにハッと気づいたのは、箱根聖会でもお話しました、あるとき、初詣の見学に行ったときでありました。初任地である潮来、小見川、住んでいたのは潮来のほうでありました。潮来の隣り町に鹿嶋市、鹿島神宮があります。ある年、初詣の見学に行ったんですね。私は牧師の子どもですから、初詣なんて一度も行ったことがなかったんです。見に行ったこともなかった。３０歳にして初めて、敵状視察と言いますか、あんなの御利益宗教だと牧師は簡単に言いますけれども、向こうを知らずして言うことはできませんね。一度行ってみようと思った。元日の朝、自分の祈りを済ませたあと、夜明け前６時頃、鹿嶋神宮に行ったんですね。生まれて初めての初詣見学とありまして、私にとっては見るもの全てが新鮮に映りました。身を切るような寒さの中、暗い参道がライトによって、黄色い光というんですかね、明るすぎない。でも黄色い光によって参道が照らされて、その中を歩きながら本堂へ行く。新年、初めの日ということですから、何とも言えない雰囲気、空気が漂っていまして、こちらも思わず手を合わせたくなる、そんな感じもしたことでした。最も興味を引いたのは、本殿の脇にテントがあって、そこに祈祷申込所と書かれている。祈祷の題目が３０ほど白いプレートに書かれておりました－家内安全、商売繁盛、学業成就…いろいろ書いてあった。ご丁寧にも、「これ以外の祈りも受け付けているから、分かりやすく祈祷課題を書け」と書いてあるんですね。一つの題目につき、祈祷料５千円－教会もこれをやれば財政が潤うのに…と思ったわけです。そこで祈られているのは、自分の健康のこと、自分の仕事のこと、自分の子どもの進学のこと、自分の家族の幸せ。みんなひたすら自分のこと、自分に関わりのある人の生活がもっと良くなりますように、高められますようにと願っている。おそらく、神社に行って、この○○の神さまが世界に広く崇められますように、と祈っている人などいないですね。そんなこと祈るのはもったいない！　神さまのことなどよりも、あそこでは、ひたすら自分のことを願い求めます、これが御利益宗教と呼ばれる信仰の姿です。

初詣見学から帰ってまいりまして、こちら数時間後、教会において真の神さまを礼拝する元旦礼拝をささげました。そのとき、ハテと考え込みました。私たちは偶像の神さまではなく、真の神さまを拝んでいるのだ！と元旦礼拝をささげている。けれども、そこで願われていることは何であろうか？　皆さんは、年の始めに何を神さまに祈り願うでしょうか？　この一年も、私の家族が健康で、私の信仰が順調に進み、仕事も守られ、できれば子どももいい大学に入って…。

まあ、それら一つ一つはどれも真剣な切実な願い、祈りですけれども、やっぱり聞いてみますと、結局のところ自分のことばかりであります。まあ、向こうのように「家内安全、商売繁盛」とは言わないものの、神さまに祈ることを通して、結局は、自分が「幸せになるように」ということに終始しているのではないか。教会と神社では、祈る対象が違い、祈り方も違います。けれども、お祈りしている内容、その宗教構造は、ほとんど何にも変わらない。たまたま、よその神さまにお祈りしていたのが、こっちのキリストの神さまにお祈りするようになっただけで、祈る内容はほとんど変わらない、すなわち、自分が大きくなることばかりを求めている。「ご利益」とは言わずに、「恵み」と言葉を言い換えているだけで、ちょっとスマートな言い方をしているだけで、本質においては何にも違わないということがないか？　だとするなら、私たちは神社に参拝する人たちを、あれは御利益宗教などと言えるのか？

どこがおかしいのでしょうか？　このパウロの願いと比べてみますならば、キリストと私たちの立場がひっくり返って逆さになっております。パウロは、「私の身によってキリストがあがめられることを」と願いました。けれども、私たちの祈りは、「キリストによって、わたしがあがめられることを」と願う。キリストと私たちの立場が入れ替わってしまう。「あがめられる」といいますと、「私は別にあがめられようとは思っていない」と言う人がいるかもしれません。しかし、「あがめる」という言葉は、「大きくする」という意味だと言いました。私たちは、自分をもっと大きくしたい！自分の幸せをもっと大きくしたい！　私や私の家族の状態がもっと大きく高められること、そう願っている。キリストが大きくなることよりも、自分が大きくなることが第一の願いではないか。

そこに、神さまによって造られた被造物としての人間の本来あるべき姿からひっくり返ってしまっている私たちの姿が明らかになります。パウロのこの言葉は、本来あるべき姿からひっくり返っている私たちの姿を、見事に明らかにいたします。私たちは、パウロが願っているように、本来は、造り主である神さまをたたえるために、神さまを大きくするために造られた者たちです。けれども、悲しいことに、実際には、そこからひっくり返って、本来の創造の目的から外れて、それとは反対の生き方になってしまう。教会で一生懸命奉仕をしながらも、私が注目され、私が評価されることを求めるということがないでしょうか。いや、牧師でさえも、そうであります。いい説教を語りたいという、その思いの底には、私があがめられ、私が評価されることを願う心がある。教会を大きくしたいという願い、「ああ、○○先生素晴らしい」と褒められることを願う、その心が献身者の心の中にも、心の底に巣くっていたりする。自分が大きくなるために、熱心に神さまを礼拝し、熱心に祈る。これは、「神さまを利用する罪」であります。私たちは、神さまを利用してでも自分が大きくなりたい。これこそ、「古き人」と呼ばれる、生まれながらの私たちの罪の姿であります。

これに対して、パウロはなぜ、生きるにも死ぬにも、キリストがあがめられることを第一に求めているのでしょうか？－続く２１節にそのカギがあるようであります。有名な言葉です、「わたしにとっては、生きることはキリストであり、死ぬことは益である」（２１）。「生きることはキリスト」というのは、「キリストのために」と言っているのではなくて、「生きることはキリストそのものだ」ということですね。キリスト抜きにしては、自分の人生は成り立たなくなってしまう。最近テレビでやっておりました、あのオリンピック三連覇を成し遂げた男子柔道の野村忠宏選手、先日の引退会見で、自分にとって「柔道は人生そのものだ」と言っておりました。柔道がなかったら、自分の人生はなかった－「私にとって、生きることは柔道」という感じですね。パウロが「生きることはキリスト」と言ったのは、この私からキリストを取ったら、私は生きることができなくなってしまう！　それほどまでに、自分の人生とキリストが堅く結びついている。

後半の「死ぬことは益である」とは、普通では考えられない言葉です。なぜ死ぬことが益なのか、その後の２３節の後半を見ると分かります。「わたしの願いを言えば、この世を去ってキリストと共にいることであり、実は、その方がはるかに望ましい」。この世を去る、すなわち、死ねば、ついに完全な形でキリストと共にいることができる。だとするなら、私としては、生きているよりも死ぬことのほうがはるかに望ましく、そのため、死ぬことは益であると言う。

ここで使われている「益」という言葉は、調べますと、新約聖書では３回しか出てきませんけれども、ここの他もう１回、ピリピ書にもう一回出てきます。３章の７節に出てきます。「しかし、わたしにとって益であったこれらのものを、キリストのゆえに損と思うようになった」。「益であったこれらのもの」というのは、その前に挙げられている事柄です、人間的に頼りや誇りとするもの。すなわち、自分は八日目に割礼を受けたれっきとしたユダヤ人であること、由緒あるベニヤミン族出身であること、さらに律法を重んじるパリサイ人であること、自分こそユダヤ人の中でもエリート中のエリートだ！と誇っておりました。それが自分にとって大きな益であった。

「しかし、わたしにとって益であったこれらのものを、キリストのゆえに損と思うようになった」（７）とパウロは言う。すなわち、救い主キリストに出会ったときに、私の中で価値観が全く変わってしまったと言っています。それまで益だと思っていたものが、もう何の価値もないものになった、いや損と思うようになった。その後の３章８節に、「わたしは、更に進んで、わたしの主キリスト・イエスを知る知識の絶大な価値のゆえに、いっさいのものを損と思っている」、そうパウロは言います。私にとって、イエス・キリストこそ最高の価値あるもの、最高の益に変わった。そのキリストと共にいることができるなら、私にとって死ぬことは益である、と言う。

しかし、パウロにとって、「死ぬことは益である」と言い切るほどに、なぜそこまでキリストが絶大な価値ある存在となったのでしょうか？　それは、このキリストは、私たちのために十字架にかかってくださったキリストだからです。キリストは、私たちを救うために、十字架で命を捨ててくださった。それは言うならば、この私を救うためならば、ご自分の命と交換、引き換えにしてもいい！と言ってくださった、ということです。引き換えにするということは、この私に対して、ご自分の命という最高の価値をつけてくださった、ということですね。私たちは、自分にとって価値があると思ったならば、多少の犠牲はいとわないものであります。私はときどき、仙台を本拠地といたしますプロ野球の楽天イーグルスの応援に行くんですね。あるとき、思ったより寒かったゲームのときがあって、その寒さを理由にして、何千円もする赤いパーカーを買ったんですよね。家に帰ると、家内はそれを見てひと言、「もったいない！」と言いました。「もったいない！」。家内に何て言われようと、私にとっては、楽天のロゴが入ったパーカーのためならば、何千円払ってもいい！何千円と引き替えにするほどに、この赤いパーカーは価値がある、と私は思うわけであります。

キリストは、私たちのために、命をかけたというのは、この私と引き替えにするならば、何千円ではない、ご自分の命と引き替えにしても良い！と言われた。神に捨てられても仕方のない罪人を、「あなたは尊い！」、そう言ってくださる。ご自分の命と引き換えにするほどに、この私を価値ある者としてくださった。もうこれ以上ないほどに、これ以上値がつけられないほどに、私たちを大きく大きく、高く、最高の価値をつけてくださった。ご自分の命と引き替えにするほどに価値ある者としてくださった。ですから私たちはもう、自分で自分を大きくする必要はなくなりました。人々の前で必死になって、「私はこれだけ価値があります」と、そんなアピールする必要はもうなくなった。なぜなら、キリストが私たちに対して最高の価値を、もうつけてくださったからです。「私が命をかけるほどに、あなたは価値がある！」。イエス・キリストが十字架で示してくださいました。このキリストの十字架の恵みが分かるときに、「自分のために、自分があがめられるために生きる」という、その囚われから、私たちはついに解き放たれる。もう私たちは、自分で自分を大きくする必要がない。自分で自分を、皆の前で、「私はこれだけ価値があります！」とアピールする必要がない。

そのとき、私たちにとって、このキリストこそ最高の価値あるお方と変わります。「わたしの主キリスト・イエスを知る知識の絶大な価値のゆえに、いっさいのものを損と思っている」（３：８）と言ったパウロと同じように言うことができる。イエス・キリストを知ること以上に価値あるものはない！　そしてこれからは、私にとって価値ある、このキリストを大きくするために生きる！このキリストの素晴らしさを伝えるために生きる！　生きるにも死ぬにも、わたしの身によって、キリストがあがめられることを！と願うように変えられていく。

「きよめ」というのは、それまでの「私があがめられるために生きる」という古い生き方から、ひたすら「キリストがあがめられるために生きる」、その新しい生き方への大きな方向転換がなされることであります。今回のテーマとして掲げました、「私ではなくキリスト」。「私ではなくキリスト」、これがきよめの生涯であります。これこそ、「古き人」から「新しい人」へと大きな方向転換をした人の生き方です。そして、十字架の主イエスの圧倒的な恵みが、私たち一人一人をそのような生き方へと押し出して下さる。皆さん、私たちもパウロのような真っ直ぐな、ひたすらな、一途な、キリストを指し示して生きる、そんな生き方をしたいと思わないでしょうか？

昨年の第８回全国信徒大会は、千葉教区の皆さんの尊いご奉仕により、本当に祝福にあふれた大会となりました。その大会の中で、教団委員長の中西先生が、「輝け！星のように」という題で説教をなさいました。そのメッセージを聞きながら、ホーリネスの恵みに生きる私たちが、「星のように輝く」というのは、どのような姿を指すのだろうか？と考えておりました。「星のように輝く」と言っても、人々の前に自分の素晴らしさを必死にアピールするような、そんな態度ではないはずであります。「私を見て、私を見て！」と、人々の注目を自分に集めようとして生きる生き方ではないはずであります。そのときにイメージに浮かんだのは、マタイ２章で東の国の博士たちを導いたあの星であります。星は明るく輝きましたけれども、それは自分に人々の注目を集めるためではありませんでした。博士たちを救い主キリストのもとに導くために、明るく輝いた。キリストの証人たちの輝き方はそのようなものであります。自分が大きくなること、自分があがめられることを求めるのではなく、人々の前にキリストが大きくされ、キリストがいよいよハッキリと見えるようになることを求める。

私にとってこの２０節の聖句は、様々な囚われから解放してくれる喜びの知らせであります。もうあなたは、生きるか死ぬか、自分がどうなるのかを第一に追い求める必要はなくなった。キリストはあなたを、ご自分の命をかけるほどに価値あるものと見てくださった。生きても死んでも、神によって愛されている、そのあなたの価値はどんなことがあっても変わらない！　そのあなたは、ただ一つ、この目的のために生きれば良い！　「生きるにも死ぬにも、わたしの身によってキリストがあがめられること」を。皆さん、私たちはもう、自分で自分を大きくして生きる必要はないんです。キリストが、自分でどんなに頑張ってもできないくらいに、大きな価値をつけてくださいました。今度は、救い主キリストを大きくするために、キリストがあがめられるために、ただこの一つのために生きればよい！　これは嬉しいことですね。

このように述べるパウロは、牢獄に捕らえられ、明日の命も分からぬ身です。けれどもパウロは、そこにいながら、こんな状態ではキリストの栄光を現すことなどできない、とは言わなかった。なぜなら、主がこの私を生かして、今、ココに、この場所に置いていてくださるからです。それゆえ、自分の身を恥じることなく、大胆に語ることを選び取る。

私たちも「こんな私ではダメだ」と、自らの至らなさや、お粗末さに拘ったりはいたしません。もうそんなことはしない。こんな私を買い取ってくださった神さまが、私を今、ココに、この家庭に、この職場に、この教会に、この地域に置いてくださる、遣わしていてくださると信じるからです。この罪人も、神さまの大きな御手の中にあって、神さまの栄光を現す者へと造りかえられていく！　それに応えて、ひたすら主のために生きる、主の教会のために遣えて生きる。

私たち一人一人は、実に様々な弱さや欠け、人間としての破れを抱えている者たちです。けれども神さまは、そういう私たち一人一人を通して、ご自分の栄光を現そうと願っておられます。ある人は、「私たち一人一人は、キリストがあがめられるための舞台となるのだ！」と言いました。この醜い舞台を通してキリストが現されていく。この私を通して、キリストの素晴らしさが人々の前に示されていく。だとするなら、その主の招きにお応えして、「主よ、私はこんな者ですけれども、あなたの栄光のために用いて下さい」と、そう願うのではないでしょうか。こんな私ですが、この私を通しても、あなたの素晴らしさが現されますように！　「生きるにも死ぬにも、わたしの身によってキリストがあがめられる」ことを、これを私たちの第一の願いにしたいと思います。

お祈りをいたします。

「そこで、わたしが切実な思いで待ち望むことは、わたしが、どんなことがあっても恥じることなく、かえって、いつものように今も、大胆に語ることによって、生きるにも死ぬにも、わたしの身によってキリストがあがめられることである。」

天の父なる神さま、あなたの御名を讃えます。私たち一人一人をこのところに招いてくださって、主の御思いを聞かせてくださりありがとうございます。パウロの言葉に照らし合わせてみるならば、私たちの生きている場面、場面が、ひたすら自分をあがめられるようにと、そう願いながら生きている、そういう場面が思い出されることであります。けれども、み言葉に聴き、この私も、キリストがあがめられるために生きたいと願う思いが与えられました。あなたが、私たち一人一人をも、そのような生き方へと押し出していてくださることをありがとうございます。十字架のキリストが、ご自分の命と引き替えにしても良いと言ってくださった、大切なこの私です。もう、自分を大きくして生きる、その囚われから、あなたが解き放ってくださいました。今度は、ひたすら、最高の価値あるキリストを指し示す生き方へと、向きを変えさせてくださいますようにお願いをいたします。

この千葉教区に集うお一人お一人の上に、また、立てられている一つ一つの教会の上に、主がお望みくださって、それぞれを通してキリストが大きくされていく、キリストがあがめられていく方々、また教会とならせてくださることをお願いをいたします。

感謝し、主イエス・キリストのお名前によってお祈りをいたします。アーメン。

賛美をささげながら、恵みの座を開きたいと思います。私たちも、主の御前にひれ伏して、跪いて祈りたい、そういう方がいらっしゃるでしょうか。どうぞ、そういう方は、賛美をしながら前に来ていただいて、一緒に主の御前に祈りたいと思います。